

創設期の学会名称をめぐって

片岡徳雄

学会設立の背景や事情について、一言、書いてほしい。そういう要請を突然編集委員会からいただいた。15年前になる設立時の思い出めいたものを、リタイアして久しい自分が書いて、役に立つことがあるのだろうか。いぶかりつつペンを取った。

一つだけ気になることがあった。学会を立ち上げるとき、学会名「日本子ども社会学会」をめぐって、少しだけでもめたことがある。

まず、この中で「子ども」という名称。はじめからスンナリ「子ども」であった。四の五の論議はまつたくなかった。しかし、考えてみると、表記の仕方一つとっても大変である。「こども」かそれとも「子供」か。前者では少ししまらないし、後者では「供」が誰かに従属するようで適切ではない。その点、「子」一字を漢字にした「子ども」は、とりたてて独創的でもないが、この場合、座りがよかった。内容的には、「子ども」でよいか。難しい問題が残っている。例えば、親に対する子ども。大人に対する子ども。発達段階からみてどの段階一年齢層一の子どもか。外国の子どもに比べての、日本の子どもという観点で用いられる例もある。日本の子どもにしても、いつの時代の子どもか。いろいろなイメージが多様に湧く。多義多様であり、範囲・対象が限定されにくい。学術用語としてふさわしくない、学会名称としてどうか、と考えられそうであった。ところが、むしろそのあいまいさが、研究の対象や方法の多様さを予想させて、新しい学会の名称としてよかった、と考えられたのだろうか。論議を呼ばなかった。

問題は「社会」という言葉をめぐっての読み方であった。新学会設立のための世話人の中には、「子ども社会学会」という名称は、無前提の形で出され、なんの疑義もさしはさまぬ言葉として受け入れられ、使われてきていた。世話人たちはほとんど教育社会学会のメンバーとして顔見知りであったから、「教育」が「子ども」に代わり、あと「社会学」が付いた。と言ったらあまりにも安直すぎるが、それほどスムーズな語転換と接続であった。こうして、なんとなく「子ども（一拍おいて）社会学会」あるいは「子ども（の）社会学会」あるいは「子ども」社会学会、といったイメージが流れていた。

そうした流れの中、学会名称が「これでよいか」という念押しするとき、「待った」がかかった。「別の読み方があるはしないか」というのである。すなわち、「子ども社会（一拍おいて）学会」あるいは「子ども社会（の）学会」あるいは「子ども社会」学会、といった連結である。そして、このような連結の方が、新学会の名にふさわしい、というのである。

多いに論が盛んになった。甲論乙駁である。その詳細はおぼつかないが、要するに、「子どもの社会学会」だと、それは社会学の一分野に限られる。言うところの子ども研究が社会的という「しぼり」を受けることになる。それに対して、「子ども社会の学会」だと、ここで

言うところの子ども社会研究は、社会学だけにこだわらず、関連諸科学—教育学、心理学、幼児学、文化人類学、児童文化、民俗学、社会福祉学など—との関連が容易である。これに対して「いや、そうでもない。」多くの他の諸科学の参加・連携が大事とはいえ、中心になるのは社会学ではないか。「子どもの社会学」といってよいのではないか……。『子どもの社会学会』か「子ども社会の学会」か。「の」の字一つの入れ方で、事態・理念は大きく変る。

今にして思えば、この両者の読解のくい違いについて、いっそうの論議が必要であった。しかし、学会設立への機運も熟している。ここで両論のために水をさすのは残念だ、という配慮が働いたのか、論議の流れは両論の解釈を互いに認めあう方向を取ったように思う。具体的にいえば、新しい学会の目的について両論に共通認識があるか。すなわち、「子どもの社会学会」と読む場合でも「子ども社会の学会」と読む場合でも、新しい学会設立の最低条件として、その学会の目的はなにか。それは、子どもの社会関係や子どもの文化を明らかにすることである。前者「子どもの社会学会」でいう「子ども」とはそのような社会関係や文化をもった「子ども」であり、後者「子ども社会の学会」でいう「子ども社会」もまたそのような社会関係や文化をもった「子ども社会」である。学会名称の読みの違いはあっても、両者は学会の目的に関して共通の姿勢を失うものではない。このような着地点を見つけたように思う。

以下は私の憶測に過ぎないが、このような一種の両論併列が了承されたのには、もう一つの深いところで支える土壌があったからかもしれない。というのは、社会学には過度な数量的客観主義がともすれば見られることがある。これに対して、子ども社会学の研究者たちは強い拒否感を持っている。彼らは、数量的考察をすべて否定はしないが、よりいっそう記述的考察を重くみる。具体的に言えば、面接、観察、収集、実験（試行）、記録などのフィールドワークである。このような「数量」よりも「記述」重視の共通性が、「子ども社会の学会」か「子どもの社会学会」かという峻別に、ゆるやかな裁定をもって臨んだ背景だったかもしれない。学会名の解釈の両論併列を温存した背景だったかもしれない。

次に、学会紀要に目を移そう。研究紀要は学会発足（1994年）の翌年に創刊された。この時、特に印象に残るような議論はなかったように思うが、生まれたのは、日本子ども社会学会編『子ども社会研究』である。仮に、編集側の子ども社会学会の方に「子どもの社会学」と「子ども社会の学」という読み違いが温存されていたとしても、刊行物のタイトルは「子ども社会研究」である。「子どもの社会研究」とは読めず、「子ども社会の研究」でしかない。すなわち「子ども（に関する）社会研究」でも「子ども（のための）社会研究」でも共に意味をなさない。「子ども社会（に関する）研究」または「子ども社会（のための）研究」でしかない。『創刊号』の「発刊に当たって」には、その研究領域例として次のようなものが列挙されている。1 子ども自身の文化、2 児童文化とマスコミ、3 子どもの遊び集団と環境、4 子どもと家族、5 幼児の生活と指導、6 子どもと学校、7 中学生・高校生の生活と文化、8 子どもの福祉と社会教育活動、9 子どもの社会史、10 帰国生徒と子どもに関する国際比較。不完全な例示に過ぎないが、少なくとも、子どもの社会関係や子どもの文化を含む「子ども社会」の研究領域例といえる。学会名称の読みの両輪にからめていけば、その併列の域を少しは脱したといえるのかもしれない。

以上、学会発足に当たっての名称解釈にまつわる曖昧さについて、その若干を記した。かえって、余計な混乱を招く種になったかもしれない。深くお詫びを申し上げたい。